

CONTENTS

Page 1

■ごあいさつ

- ・「最近よく考える『家族』って…」

信楽学園園長 山之内 洋

Page 2

■学園レポート

- ・社会見学「卒園後の生活」

中原 朋紘 ・ 村上 京子

■学園メモリーズ <第2信>

障害担当理事 牛谷 正人

■イベントレポート

- ・「春のしがらき駅前陶器市」

涌井 康貴

Page 3

■学園レポート

- ・「カレー皿完成！」阿久根 沙織

■学園フレッシュさん

- ・西川・木村・坂本

- ・黒川・林・重田

Page 4

■卒園生の声

- ・就職した卒園生にインタビュー

■お知らせ ・ 経ヶ岳登山

■編集後記

ごあいさつ

今 年も暑い夏が続いております。この6月、7月は当学園の仕事を通じて、そしてさまざまな場面において『家族』というものを考えることの多い期間でした。

6月下旬に当学園も加盟しています滋賀県児童福祉入所施設協議会の事業で各施設で暮らしている小学生を対象とした「フットサル大会」が催され、私も大会役員として参加しました。小学1年生から6年生までが施設所属を越えてミックスチームで競技をしたり、近畿大会出場を目指して各施設の代表チームでの試合を行いました。どの試合も好プレーや珍プレーが続出で、誰もが興奮するような熱戦が続いていたにもかかわらず、何か物足りなさを感じていました。それはすぐに気が付きました。

熱 戦が繰り広げられる室内運動場では、試合に出ていない低学年の子どもたち、施設の職員さんたちの応援する声が響き渡っていました。何かが足りないと感じていたのは親御さんをはじめ家族からの声援が全くなかったことでした。ゴールを決めて誇らしげにガッツポーズをする女の子、強烈なシユートを防いだ瞬間、満面の笑顔の男の子。試合終了の笛と同時に勝利に歓喜する姿、敗戦に残念がる姿。しかし、子どもたちの視線の先には家族の姿はありませんでした。さまざまな事情により両親や家族と離れて施設で暮らしている子どもたちの精一杯の姿がそこになりました。頑張った姿を一番に家族に見てもらい、「頑張ったね」と声をかけてもらえる環境。私たちはそれが当たり前の環境であると思っています。しかし、世の中にはどう

最近よく考える「家族」って…

しようもないことがたくさんあります。自分の意思とは関係なく、家族と離れて生活を送っている子どもたちがいることを改めて再認識した一日でした。そして、この子どもたちには家族の声と変わらない程、大きくて、そして温かい声援がありました。同じ施設で暮らしている子どもたちや職員さんたちの素敵な笑顔や温かい声援がありました。

7 月下旬に、タイのカオディーンという農村に行ってきました。この村へは20年前にその村の学校給食を支援するプロジェクトに参加させていただいて以来の訪問でした。今回はこの村に高齢者のデイケアセンター建設の支援プロジェクトということで全国各地の若手の福祉関係者たちが参加され、我が法人からも4名が参加しました。村の学校では子どもたちと一緒にサッカーや野球、日本から持ってきた玩具で遊んだり、音楽を楽しんだり、ホームステイ先ではその家族と食事をしたりして4日間過ごしました。そして、交流を深め、村の人々と仲良くなればなるほど、この村の人々の温かさや優しさを強く感じていきました。この村では、20年前は高床式の窓もない家だったステイ先の家が立派な新しい家に建て替えられている家が多くありました。これは当時小学校に通っていた子どもたちが、村を離れ、都会で頑張って仕事をし、その稼いだお金で両親のために建てたんだと聞きました。また、カオディーン村以外ではバンコクの中心部にあるスラム街を視察しました。タイでは15万人の人々が大小のスラム街で暮らしている

とのことでした。親から離れて暮らしている子どももいました。

信 楽学園も15~18歳の期間限定ではありますが、滋児協に加盟している他の児童施設と変わらず、児童入所施設です。家元を離れ、寮生活と工場作業、職場実習を通じて、自立・自律する力を身につけてもらえるよう支援をしている施設です。

当 学園の児童についても、声をかけて欲しい時に家族がすぐ傍にいない場面もあります。作業や実習で褒められた時に一緒に喜ぼうと思った時に、そこに家族がないことがあります。それが入所型の施設だと一言で言ってしまえばそれまでですが、自分の身の回りで起こったことに対して、一緒に喜び、悔しがり、怒り、笑える人が傍にいることはどれだけ幸せなことか、それが家族ならなおさらです。そんなことをふと考えさせられることがあります。

当 学園では週末の帰省の際に、児童たちから家族の皆さんにその週にあったことを報告され、一喜一憂されていることと思います。また職員からの連絡ノートを通じて、その週を振り返っているご家庭もある



かと思います。当学園の利用に至るまでの経緯も様々ですし、卒園後の生活環境も様々です。しかしながら、この3年間を通して「家族とは」「家族間との距離」などをじっくりと考えられる時期でもあるかと思います。当学園の児童たちは18歳で社会に巣立っていきます。一般的に早いと思われる人もいるかと思います。今年から選挙権が18歳以上に引き下げられました。この3年間は、もう一つ、『親離れ、子離れ』を具体的に考える時期であってもいいのかもしれないとも思います。

なかなか難しい内容ではありますが、引き続き、皆様と一緒に考えていくたらなと思っておりますので、今後ともご指導の程、賜りますよう、よろしくお願ひいたします。

信楽学園 園長 山之内 洋

男子は
グループ
ホームに

おもやキッチンの食事は
おいしかった。
ありがとうございました！



自分で働いて行かないとい、
何もできないんだなーと思いました。
生活するということは、
自分のことは自分でやらなきゃ
いけないんだと思いました。



男 子は、グループホームでの生活は、「誰かと一緒に住むことはしんどい。嫌…」という意見がありました。しかし、グループホームであれば、自宅に帰ってあれ、もう、自分たちは社会人となるので、「自分のことは自分でしなくてはいけないんだな！」という、気持ちを持つことが出来たようです。

女 子は、憧れであった“好きな人と結婚”するという夢を叶えた人に実際に会い、話を聞くことができ、自分と重ねながらも、その為には“努力が必要”とも感じたようです。

その女性が話していた、目標を持つこと、相談できる力をつけることの大切さを改めて知ったようです。

女の子たちは、“ステキな女性になりたい！”を目標にもついていて、今、やらなければいけないことをすることで、一歩一歩近づいていくことができる事を知らせていくみたいです。

中原 朋紘・村上 京子

女子は
老人ホームと
グループ
ホームに

自立するためには、
相談できる相手を見つけること
が大切と話されました。



結婚をして、子育てを
しながら働いている人がいました。
その人が「目標を持つことが大切」
と話されました。
自分も目標を持つように
なりたいです。



学園メモリーズ 第2信 sweet memories

前 回、紙面を埋めるため（？）書いた文章が、思ったより好評だったので連載することになりました。連載にあたり当時の資料などあさってみたところ登山の写真や学園広報「だいち」が出てきて原稿を書くのを忘れて思い出に耽ってしまいました。

私が信楽に赴任したのは昭和の最後の年でした。
朝日寮での約2ヶ月の暮らし仮住まいの後、
正式に職員になって敷地内の官舎住まいに移りました。

当時私以外には先輩職員ご一家が家族で官舎に住まわれており何かとお世話になりました。

また北村信雄園長や北村哲哉先生もほぼ敷地内といつてい住宅でしたので、よくご自宅を訪ねて学園の今や昔のことを伺いました。

大学2年の春に始めて信楽を訪ねて以来、毎年青年寮を中心に実習や卒論・修士論文の調査で信楽に入り浸っていたので信楽での生活に違和感はありませんでした。それよりも学生から職員になったことで指導者としてのかかわりをしていくことへの不安感は大きかったように思います。そんな中で先輩職員が身近におられ、園長先生含めて年配の職員が日々宿直や入浴の支援に入られている姿や当直勤務のたびに夜遅くまで職員室で話ができたことなどが大きな学びと支えになったと思います。



「東京から大学院卒の職員が赴任する」ということで私の知らないところで大きな話題になっていたこと、また男性職員でそれまで一番年下だった奥村先生が「やっと後輩ができると思ったらかわいくなかった」と思っていたことなど後から聞く話も驚きでした。着任早々に、「五位の木窯」の開設書の中にある「景色」がわかりにくくと「表情」に直してもらったり、その後広報誌やパンフレットの体裁を改めてもらったりとわからないが故に大それた提案をしては先輩職員の皆さんを困らせていました。

今から想えば福祉を座学できちんと学ばなかったこと、信楽の実践を池田先生はじめ諸先輩の経験談として伺ってきたこと、大学を卒業して直ぐに信楽にきたのでなくクレヨンハウスを経由したこと等がかえって色々な提案をしていく力となって活きたのではないかと思います。

副理事長・障害担当理事 牛谷 正人

イベントレポート

今 日は『春のしがらき駅前陶器市』に出掛けての実地販売。「いらっしゃいませ～」「どうぞ見ていって下さい。」売り子として声をあげている園生さん達がいました。工場の中ではようやく声を張り上げて返事や挨拶ができるようになった人ばかり。ましてや他人に話しかけるなどしてこなかった園生がほとんどです。普段の生活からは信じられないぐらいです。

あ る園生は一言こんなことを言っていました。
「自分が作った茶碗卖りましたか？」と。
そうなんです。自分が作った陶器を売るため、また、売ることで自信となるのです。今回の『春のしがらき駅前陶器市』は4月29日～5月5日まで開催されました。例年にない大盛況。天候にも恵まれて大きな売り上げを記録しました。在園生は実地販売として初日の販売を手伝ってもらいました。その他の日も連日、卒園生や在園生が手伝いに来て販売を手助けしてくれていました。本当にありがたい話です。



信 楽学園の陶器の多くは、納品という形でおろしていくので、実際に売れるのを見るのはこういった形でしかありません。自分の作った物はどうなっているのだろうと疑問に思う園生さんは少なくないです。だから、実際に売れる場が見える『春のしがらき駅前陶器市』は園生の自信になります。力になるのです。『春のしがらき駅前陶器市』は地域の貴重な場ですが、園生にとっても貴重な場なのです。

涌井 康貴

学園レポート



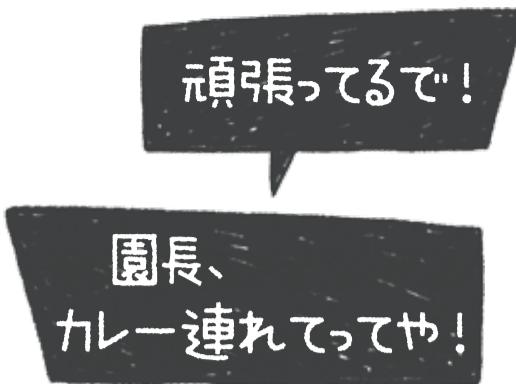
6 月の終わり頃、あーでもないこーでもない、あー難しい、あーカレーが食べたい！
そんなことをぶつぶつ言いながら、ついに『がむしゃらカレー皿』は誕生しました。
仕切りのあるカレー皿作れる？園長からそんな話を頂き始まったカレー皿制作・・・これが
とても大変でした。サイズも大きく仕切りもあってそれなりに深さも必要。
粘土は可塑性があり自由自在に形を変えられるものではありますが、サイズが大きく形がい
びつになればなるほど粘土は言う事を聞いてくれず、手作りでそれを作るにはなかなか思うよ
うにはいかなかったのです。試行錯誤を繰り返した1ヶ月でしたが、今何とかゴールが見えて
きています。

がむしゃらカレー皿



「またカレー皿やってんの？」 「がむしゃらのカレーみんなで行ったなあ」 「あそこのカレーおいしいな、僕ら5杯も食べたで！」 「お皿が出来たらまたみんなで行きたいな」と制作の
様子を見て子ども達が楽しそうに話をしています。

本当に出来るのかと頭を悩ませる時もありましたが子どもたちのそんな会話が最大の励みとなり、またやる気へと導いてくれています。



今 では「カレー皿作ります！」と声をかけてくれ、絶妙な手つきでカレー皿を作る子
どもの姿はとても頼もしく感じます。普段はしっかりしなくてはと思う職員の立場では
ありますが、こんなふうにゼロからモノを作ることで悩み苦戦する姿を見せるることは決してマ
イナスではなかった、互いに感じ取るものがあり、これでよかったんだな。と思っています。

季節はいよいよ夏になり、こんな時こそカレーが食べたい！とさらに食欲が湧いている今、
ますます制作に力を入れ、たくさんのかわいいカレー皿が焼きあがった時にはぜひともお腹一杯がむし
ゃらカレーをがむしゃらカレー皿で食べたいと願っています。

阿久根 沙織

学園フレッシュさん

学 園に勤務を始めてから早4ヶ月
が経ちました。
日々の業務をこなすことで精一杯で、
あっという間の日々でした。まだまだ分か
らないことだらけで、子ども達に教えて
もらうことの方が多いような状況ですが、
子ども達と一緒に学園の生活に慣れて
来たのかな、とも思っています。これから
も「職員は児童の手本であれ」という
池田太郎氏の言葉を忘れずに自分を客
観的に見ながら日々の業務に励んで
いきたいと思います。 西川 まみ



春 に学園に来てから早4ヶ月が経ちました。毎日子ども達と関わるなかで、沢山の
事を子ども達から教えて頂き、学ぶ機会を頂いています。子どもと関わる中で
自分の関わり方がこれでいいのかと考える時もありますが、子ども達とも自分自身とも
自分らしく向き合っていけたらと思います。 木村 春香

十 だいま」5年ぶりに学園に
もどってきました。

前回始めた4年間は、子ども達や先輩
職員から多くの事を学び、栄養ケアマネ
ジメントをスタートさせ、厨房が直営から
委託に変わる変化を体験しました。

今回は何ができるだろうかと考えるな
か、まずは目標を“食育”と掲げ、子ど
もたちと楽しく活動を進めていきたいと
思っています。 重田 直美



信 楽学園に勤務して4ヶ月が
経過し、日々、子ども達と生活
や活動と共にしながら過ごしています。
毎日、工場や実習先での活動に励む
子供たちが、少しでも社会生活力をつ
けて卒園し、社会人となった時には、自
分の力で生き、幸せな日々が過ごせる
ようにと願いながら仕事をしています。
微力ながら、自分ができることを全力で
取り組みながら、頑張りたいと思っ
ています。 坂本 ゆかり



二 の4月から兼務で総務課長として信楽学園に
勤務することになりました。
粘土作業を通じて仕事をしていく力を、寮での生活を
通じて規律正しく生活する力を身に付けてもらえるよう、
あまり顔を見せることはできませんが、笑顔を忘れずに
接しながら、陰ながら園生の皆さんをサポートさせて
いただきます。 林 邦修

私 は平成26年4月から平成28
年3月までの2年間は法人内
他施設と信楽学園の兼務であったため、
月に4~5日を信楽学園で兼務事務
職員として過ごしておりましたが、この
4月の人事異動に伴い常勤事務職員
となりました。

若輩者でございますが、他施設で
の経験等も活かしながら一生懸命頑
張りますのでよろしくお願いします。
黒川 勝利



卒園生の声



就職した卒園生にインタビューしました！

岩崎 秀則さん

平成 23 年度卒園生（現在 23 才）

信楽学園を卒園後、トヨタ紡織滋賀株式会社に就職。自立生活支援ホームで、自立した地域生活を学び、今年の 3 月から仕事場に近い場所にアパートを借り、一人暮らしを始めました。

走ることが大好きな青年です。

トヨタ紡織滋賀株式会社は、岩崎君の「走ることが大好き」を全力で応援してくれています。毎年、全国大会には応援行ってくれています。

INTERVIEW



前田 浩志さん

平成 24 年度卒園生（現在 21 才）

信楽学園を卒園後は、サニーサイド（就労継続 B 型事業所）で 2 年半作業をおこないました。働かなければいけない・・・とわかっているながら、でも、身体が動かなかった信楽学園時代。しかし、サニーサイドでの作業の中で、もう少し給料がたくさん欲しい、本と関わる仕事がしたい！という気持ちが大きくなり、去年の 9 月の合同就職面接会で本屋さんの求人票を見つけ、面接・実習を受け、正式に採用となり、現在は夢が叶い、平和堂水口店の中にある本屋に就労しています。

INTERVIEW

Q1. 信楽学園に来てよかったと思うことはありますか？

「友達が出来てよかった。就職が出来てよかった。寮生活は楽しかった。」

Q2. 困ったときに相談できる人はいますか？ 「はい」

Q3. 仕事時間は？ 「はい、今まで 8 時～ 17 時でしたが、一人暮らしを始め、7 月から夜勤の勤務も始めました。

8 時～ 17 時の勤務と 20 時～ 5 時の勤務の 2 交代です。」

Q4. 仕事の内容は？ 「車の部品（バンパーなど）のライン作業」

Q5. 仕事をしていて楽しいことはありますか？ 「楽しいことはないです。でも、働き出してもう 6 年目です。仕事内容も最初とはかわってきた。やりがいはある。ボーナスもあり、うれしい。」

Q6. つらいこと、しんどいことは？ 「働くのはしんどい。辞めたいと思うことはたまにある。」

Q7. 辞めないのはなぜ？ 「働かないと生きていけないから。。。生活できない。すぎなものが買えない。」

Q8. お給料は何に使っていますか？ 「生活費と陸上グッズ」

Q9. 毎月のおこづかいはいくら？ 「3 万です。足りないからもっとほしいけど我慢している。。。」

Q10. 休みの日は何していますか？ 「気楽に友達と遊びに行ったり、陸上の練習をしたりしています」

Q11. 趣味はなんですか？ 「陸上です。障がい者スポーツ大会（陸上の部）で全国大会を目指しています。」

*毎年、全国大会に出て、メダルをとっています。

Q12. 自立生活支援ホームでどんなことを学びましたか？ 「休まずに仕事に行くこと、料理、お金の使い方、車の免許、原付バイクの免許がとれた。」

Q13. 今の目標は？ 「足が速くなること。自分より、早い人はいっぱいいるので、勝ちたいです。今年の全国大会は岩手県です。」

お知らせ

きょうがたけ 経ヶ岳登山

今 年度も野外活動として、登山を行うこととなりました。昨年、一昨年と鳥取県・大山へアタックしていましたが、心機一転今年度は全員が一つの山へ登ることの出来る「連山」であることなどから福井県・経ヶ岳に変更することになりました。



編集後記

秋 の気配を感じつつも、
まだ夏の日差しが照りつける中、
当学園は登山練習や工場作業、
町内実習と活気に満ちています。
残暑厳しい中ですがおいしい
カレーを食べて活力をつけて
がんばります。

信楽学園ニュースレター編集スタッフ一同



ふもと 鹿 のキャンプ場や周辺施設での自然と触れ合う体験を通じて、体力を付けることだけでなく、自然の大切さ、一つのことに集中して取り組む力を身につけてもらいたいと思います。

また、園生だけでなく職員も一緒になって取り組むことが出来ればと思っています。

担当／林・逢坂



信楽学園 ニューズレター Vol.4 Newsletter from Shigaraki Gakuen

編集・発行 ■ 社会福祉法人グロー（GLOW）
～生きることが光になる～

■ 滋賀県立信楽学園
〒529-1812 滋賀県甲賀市信楽町神山470
☎0748-82-0051 / email : shigarakigakuen@glow.or.jp
(メールアドレス変更しました)

構成デザイン ■ 上垣 智史 / mdf@design